

V. 支援教育研究

目 次

- 1 はじめに
- 2 アセスメントに基づいたユニバーサルデザインの授業づくり 2
～学校全体でベクトルを合わせ、推進するために～
- 3 学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展
- 4 安心して学び合える授業づくり
～どの子どもにもわかりやすい授業（ユニバーサルデザイン）～
- 5 すべては子どもたちの「できた！」のために

1 はじめに

1 支援教育の調査研究について

特別支援教育が法制化されて 10 年をすぎ、通常の学級においても、学校生活に困難がある児童生徒の個に応じた配慮・支援と、特別支援教育の考え方を取り入れた通常学級の授業づくり（授業のユニバーサルデザイン化）、学級づくり（個のちがいを認め合える集団づくり）の実践が定着してきている。今年度は、支援教育研究協力校において、中学校では梅花女子大学 伊丹昌一教授、小学校では神戸親和女子大学 森田安徳准教授にご指導をいただきながら、授業のユニバーサルデザイン化、通常学級における支援教育について、研究に取り組んだ。協力校の担当教員は教育センターの支援教育研究員でもあり、自校の取組みを市内各校に発信し支援教育を推進する役割を担っている。

2 研究テーマ

全体テーマ：「ユニバーサルデザインの視点をいかした安心して学び合う授業～子ども達のつながりを目指して～」

各協力校の研究テーマは下記のとおりである。

A 小学校	「アセスメントにもとづいたユニバーサルデザインの授業づくり 2」 ～学校全体でインクルーシブ教育を推進するために～
B 中学校	「学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展」
C 小学校	「安心して学び合える授業づくり」 ～どの子にも分かりやすい授業（ユニバーサルデザイン）～
D 中学校	「すべては子どもたちの「できた！」のために」

3 活動概要

支援教育研究員連絡会

月に 1 回程度集まり、各校の研究内容を交流し研究を深めていった。

- 第 1 回：支援教育部門研究会について
- 第 2 回：各研究による今年度の目標（研究テーマ）の設定を報告
- 第 3 回：各研究の研究テーマ及び進捗状況の報告・交流
- 第 4 回：各研究の研究テーマ及び進捗状況の報告・交流
- 第 5 回：教育センターフォーラムに向けて打ち合わせ
- 第 6 回：教育センターフォーラムリハーサル
- 第 7 回：教育センターフォーラム
- 第 8 回：1 年間のまとめ

教育センターフォーラム

平成 30 年 2 月 21 日（水）に開催された第 5 回茨木市教育センターフォーラムにおいて、4 名の研究員が発表を行った。

2 アセスメントにもとづいたユニバーサルデザインの授業づくり 2 ～学校全体でインクルーシブ教育を推進するために～

谷 良子

1 はじめに

本校は、支援教育研究協力校2年目を迎えた。今年度は、次の3つの目標を軸に、すべての子どもが安心して学び合いに参加し、「わかった」「楽しい」と実感できるユニバーサルデザインの授業づくりに学校全体で取り組んだ。

2 研究目標

- (1) 「気になる子ども」たちの課題を適切にアセスメントし、ユニバーサルデザインの授業づくりにつなげる。
- (2) 一人ひとりのちがいや学び方の多様性が認められ、お互いに支え合える集団作りを行う。
- (3) すべての授業に、ユニバーサルデザインの視点と手立てを取り入れていく。

3 支援教育研究協力校の取組み

(1) 「アセスメント」から支援へ

① 巡回相談（教育センター）の活用

ア 学期ごとに全クラスの気になる児童の課題を巡回相談のチェックシートに沿ってアセスメントし、学年会、支援教育部会での話し合いを経て、より専門的な視点からのアセスメントを必要とする児童から優先して巡回相談を受けるシステムを設けている。

イ 巡回相談で得られた助言内容及びチェックシートは、保護者との共通理解のもと個別の指導計画にも反映させ、引き継ぎ情報として活用している。

② 日々の学習の様子や、テストからのアセスメント

つまりきや困り感の要因を分析することがアセスメントの根本でありながら、アセスメントは専門性を要するという感覚が教職員間で強く、専門機関に任せがちな現状が見られた。

日々の学習の様子やテストの誤り分析を貴重なアセスメント資料として活用し、課題に応じた支援指導につなげる重要性や具体的な手法を学んだ。

【夏季校内研修 「6事例の子ども理解と支援」

森田安徳先生（神戸親和女子大学准教授）】

③ 「学習サポートカード」を活用した、学習サポーターとの連携

ア 学習サポーターによる、子どもの実態に応じた個別支援には、担任との情報共有や支援方法、支援の成果について十分な連携が必要である。

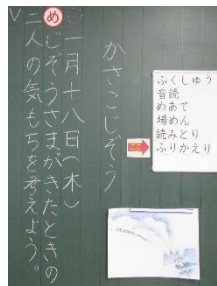
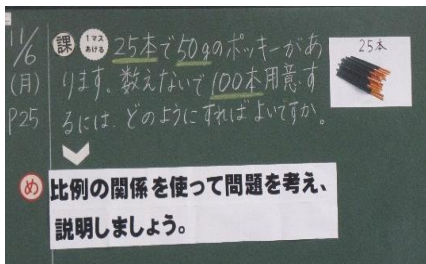
イ 「学習サポートカード」の導入により、子どもの課題や支援方法を学習サポーターと連携し、個別支援の充実や引き継ぎに成果をあげている。

(2) 一人ひとりのちがいや学び方の多様性が認められる集団づくり

「ともに学び、ともに育つ」インクルーシブ教育推進の基盤となる、一人ひとりのもち味や学び方の多様性を認め合える集団づくりや、自分の学び方に誇りを持ち、安心して仲間とともに主体的に学習に取り組む姿勢を育むため、系統性のある障害理解教育のカリキュラムの作成に取り組んでいる。

(3) アセスメントにもとづいたユニバーサルデザインの授業づくりの実践

- ① 特別な支援を要する子どもをアセスメントし、彼らも主体的に学び合いに参加し、「わかった」「楽しい」と実感できるような授業づくりに取り組んだ。
- ② 6年生算数科「比例と反比例」、2年生国語科「かさこじぞう」の研究授業を通し、「焦点化・視覚化」「構造化」「協働化・共有化」の観点に基づいたユニバーサルデザインの授業づくりを提案した。



(4) 学校全体で取り組む ユニバーサルデザインの授業づくり

すべての授業でユニバーサルデザインの視点と手立てが取り入れられることをめざし、授業づくりや教師自身の授業の振り返りの手がかりとして、森田安徳先生にご紹介頂いた「授業のUDモデル」チェックリスト、南中学校区のユニバーサルスタンダードの項目を参考に、『授業のユニバーサルデザインの視点と36のヒント』を作成した。

4 取組みの成果と今後の展望

- (1) 『授業のユニバーサルデザインの視点と36のヒント』を作成し、それぞれの目的や校内の様々な実践例を写真で解説した。「学校全体で取り組む」ことへの大きな一歩となった。
- (2) 研究授業を通し、「教科を超えて活用できるユニバーサルデザインの手立て」や「すべての子どもが学び合いに参加するためのユニバーサルデザイン」について学校全体で学び、今後につなげることができた。
- (3) 授業におけるユニバーサルデザインの目標は、「焦点化・視覚化」「構造化」「協働化・共有化」の視点と手立てを取り入れることで、すべての子どもが安心して主体的に学び合いに参加し、より深い学びを共有することにある。教科指導と支援教育の融合を今後も追求していきたい。
- (4) 支援には「アセスメント」に基づいた合理的な根拠が必要である。適切なアセスメントから、適切な支援の早期開始、継続へとつなげたい。
- (5) 一人ひとりのちがいを認め合い、支え合える集団づくりをめざし、系統性のある障害理解教育を推進し、インクルーシブ教育の基盤を固めていきたい。

3 学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展

菅野 徹

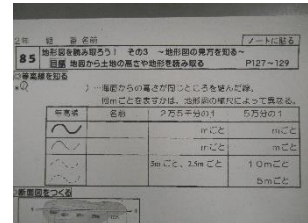
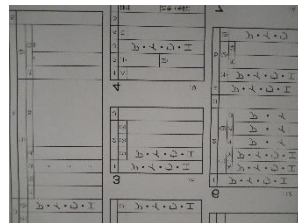
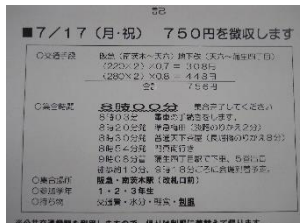
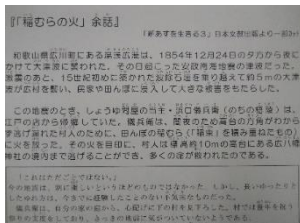
1 はじめに

学校生活のユニバーサルデザイン化は、十年ほど前から発信、実践し、ここ数年は定着しつつある。わかりやすく取り組みやすい教室の環境整備から入るので、新転任の教員も理解、実践できている。授業のユニバーサルデザイン化は平成22(2010)年度から取り組み始めている。教員の入れ替わりも多く、継承していくことの難しさを感じることもある。また新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学び」から授業の工夫・改善も取り入れながら発展させていこうとしているので、しっかりとした、てごたえを実感している教員はまだ少ないようであるが、校内の学力保障委員会や人権教育推進委員会とともに進めているところである。



2 今年度の取組み

今まで継続してきている取組みのうち、前期は「意識しないと取り組めていないもの・意識が薄れて取組みが十分でないもの」を確認しながら進めた。後期は生徒の実態や保護者との話からヒントを得て、試しにやってみようとして各学年の状況に合わせて取り組んだものと、学校全体としての前期にできていなかったものの取組みを進めた。



3 支援教育研究協力校の取組み

(1) 研究テーマ

「学校生活・授業のユニバーサルデザイン化の継承と発展」

(2) 巡回相談

学習理解に課題のある生徒には、問題プリントを「基本」「応用」と作ることがユニバーサルデザインとなること、行動面・コミュニケーション面に課題のある生徒については、反応性愛着形成不全の支援について学んだ。

(3) 校内研修

「青年期の問題行動のとらえ方と指導、支援について」

梅花女子大学 心理こども学部 伊丹昌一教授 行動を理解するために、「ABC分析（機能分析）」を学び、「きっかけ→行動→結果」のワークショップに取り組んだ。

(4) 研究授業

1年生 数学「平面図形」

授業研究テーマ「すべての子どもがわかった、できたと実感できる授業づくり
～ユニバーサルデザインの視点での教え合い～」

- ① 焦点化…ねらいや活動をしぼることで、達成感につながる。
- ② 視覚化…プロジェクター活用し、学習していることをわかりやすく表す。
- ③ 時間の構造化…授業の進め方のパターン化。

(めあて→個人で考える→ペアやグループで教え合う→全体でいろいろな考え方を共有し合う→まとめ、ふりかえり)

場の構造化…板書のレイアウト、スクリーンをはる位置など。

- ④ 協働化…教え合い、学び合いのときに対話が生まれる。

- | |
|---------------|
| ➡肯定的指示を統一 |
| ➡やろうとしたときにほめる |

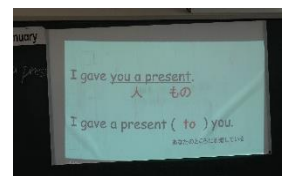
4 今年度の学びから

(1)「ABC分析」の手法によって「この行動の背景に何があるのか」と教員が生徒の気持ちを考えることを意識できるようになってきている。そして、生徒からの丁寧な聞き取りを行い、指導すべき点や今後の支援のポイントを見つけるために、教員は丁寧に生徒の話を聞きとるようになってきている。

(2)「教室の環境」は今まで教室前面の掲示物を減らすこと、カバンを通路に置かずロッカーにおくことが二本柱のようになっていたが、教室を明るくすることや、ときには座席間隔をつめて座らせることも学んだので実践して、生徒の様子をみているところである。

(3)「一見失敗に見えるできごとを失敗と決めつけず、つねにその意味を考えて、振り返る、ということが大切」ということや「そのてだてが合わなければ、次のてだてを試してみる」ということを教えていただいた。これまではやってみてうまくいかないことがあると、困ってしまい、エネルギーが減ってしまうというよくない循環に陥る教員もいたが、この生徒に有効なてだてはどれだろうと、前向きに考える、よい循環が教員の間にもうまれつつある。

(4)教室のプロジェクターとスクリーンについては、教員が機器のスペックを十分に使いきれていないことや、機器を活用することもユニバーサルデザインだと理解していないこと、効果的な運用ができていないこともわかってきた。ICT機器を必要とときに必要な分だけ使うことは、授業のユニバーサルデザイン化であるということを教員に周知して、実践を進めていくことは来年度の課題の一つとしておく。



4 安心して学び合える授業づくり

～どの子にもわかりやすい授業(ユニバーサルデザイン)～

中川 真理子

1 はじめに

支援教育協力校は昨年度に引き続き2年目である。クラスの子どもたちが授業で安心して学べるユニバーサルデザインを取り入れることを意識して取り組んできた。

昨年度は、主に学校全体の取組みである「協働化」「視覚化」「構造化」を行った。今年度は一歩進めて、クラスの傾向を把握することから、そのクラスにどのようなユニバーサルデザインが適切か考えてきた。

見えてきた子どもの実態やクラスの状況から、ビジョントレーニングや授業行動、ひらがな学習会など学校全体での取組みも行ってきた。

2 昨年度より

- (1) 引き続き学校全体で大切にしていること「協働化」「視覚化」「構造化」
- (2) 年度初めの統一 板書、ノートの使い方、繰り上がり・繰り下がり

㊦・㊧などの黒板掲示の統一

3 研究授業と校内研修会

- (1) ユニバーサルデザイン研究授業(6月)

2年 算数「1000までの数 100より大きい数をあらわそう」

- ① クラスの子どもたちの課題の把握
- ② ユニバーサルデザインの視点
「協働化」「視覚化」「構造化」の活用
個々に合った支援 環境整備 ヒントカード
板書とリンクしたワークシート



- (2) 中学校区合同授業研究会

ユニバーサルデザインを取り入れながら

黒板掲示 ワークシートの活用 ヒントカード

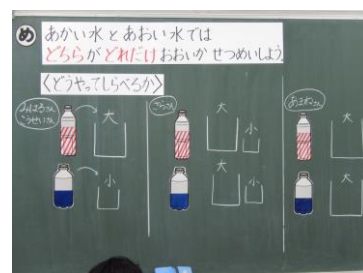
- 1年 算数 「どちらがおおい」具体物を使って考える
- 国語 「いろいろな ふね」写真で視覚化・活動の工夫
- 2年 体育 「マットを使った運動遊び」黒板・掲示を使っての視覚化
- 算数 「かけ算九九の活用」黒板掲示・ワークシートの工夫
- 3年 国語 「サーカスのライオン」教科書の視覚化
- 4年 国語 「一つの花」ヒント付きのワークシート
- 算数 「式と計算」ヒントカード

- 5年 英語 “What do you want?” ヒントカード
- 6年 社会 歴史 資料の活用・大事な所を強調する

4 ビジョントレーニング

(1) 1・2年生の課題の把握

- ① 形の認識：ボディイメージの確立
- ② 図と地の分化：目標物を見つける力
- ③ 視覚併合：一部を見ることで全体を把握する力
- ④ 形の表象化：見たものや聞いたことをイメージできる力
- ⑤ 見比べる力
- ⑥ 見通しを持つ力



(2) 取組み

(各) 週1回 朝の時間 反復練習 タングラムの使用



5 授業行動

学習がよくわかるルール・手立て 104のポイントより

- ① 学習環境
- ② 忘れ物対策
- ③ 授業の準備
- ④ チャイム着席
- ⑤ 始業・終業時のあいさつ
- ⑥ 学習態度

各クラスの実態に合わせて、ルールを設定を行う。

子どもが理解し納得して行動しているかを大切にする。



6 ひらがな・カタカナ学習会

【学校全体 漢字検定（1年 7月にひらがな聴写テスト）】

- (1) 9月の巡回相談（ひらがな聴写テスト）
- (2) 各クラスで課題を含めた指導
- (3) 冬休み明け 8回のひらがな・カタカナ学習会
- (4) 年度末 （ひらがな・カタカナ聴写テスト）→来年度に引き継ぐ

7 今年度の研究を振り返って

研究協力校の指定を受けたことで、どの子にもわかりやすい授業（ユニバーサルデザイン）を学校全体で取り組めたことは大きな成果だと感じた。授業をする時に、いかにわかりやすくするかを自然と工夫している授業も多くみられるようになった。今年取り組んだことを継続して取り組むことで、子どもたちにとって安心できるクラスから学校作りへとつながっていくと感じている。いつでもクラスの子どもたちに寄り添い何が必要か、課題を問い、そこから始めることの大切さを今までよりもさらに感じる事ができた。

5 すべては子どもたちの「できた！」のために

津本 航佑

1 はじめに

子どもたちは、何かしら課題を背負って毎日を過ごしている。それは子どもによって違い、目に見えるものとそうでないものなど、千差万別である。そんな子どもたちが、今の学校生活で、さらには卒業後充実した生活を送るために、これまでの実践も含め義務教育段階で教職員・学校は何ができるのかを求め、考え、実践した。

2 生徒たちが持つ課題に対する支援

(1) 伊丹昌一先生（梅花女子大学）からの助言

- ① 配慮の必要な生徒の理解・・・学習面、行動面、対人面など、どのような場面で、どのような原因でその行動をしているのかを整理する。
- ② 適切な配慮・・・生徒の行動を適切に捉え、それぞれに適切な配慮を行う。

(2) 教職員の情報共有（教職員の变化）

基本的に1週間単位で、対象生徒の授業中の様子や、達成度を学年で共有する。そこには、学習サポーターとの意見交流（週1回）での内容も含める。

(3) 学習サポーターによる授業の入り込み

気になる生徒を中心に、学習を支援する。生徒によって関わり方の配慮が必要。

(4) ICT機器（プロジェクター・タブレット端末）、タイマーの活用

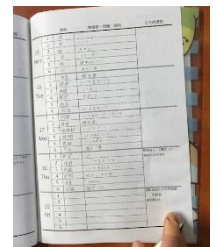
(5) ワークシートの工夫（大きさ・ルビ・問題集対応明記）

必要に応じて、記入欄を拡大したり、読み仮名を併記したりする。また、そのワークシートが対応している問題集のページもシート内に記入しておく。



(6) ぷらすノートの活用

STで次の日の予定等を書きこむためのノート。各教科係が書き込む、教室後ろに貼ってある連絡用ホワイトボードと対応している。年間行事予定がすでに書き込んである。



(7) 教室環境

- ① 授業の流れの提示・・・1時間の流れを見通す仕掛け
- ② 掲示物の整理・・・授業中、不必要なことに注意を向けないための仕掛け
- ③ 荷物整理の促進・・・忘れ物や紛失を予防するための仕掛け



3 将来を見据えた視点で考えたときに必要なことと実践

(1) 生徒たちの学校卒業後

- ① 配慮の必要な生徒が社会に出て、就労するとき、一番大事なこと
 - ア 「できる／できない」ことの本人理解とそれを伝えられること（企業はそれができることを求めている）
 - イ 他者の力をどのように上手に借りるかというスキル
- ② 他者の力をどのように上手に借りるかというスキル

(2) 集団づくりを中心に置いた授業

① 校内研究テーマ：「全員が参加し、『学び』が保障された授業」

平成 29 年度到達目標：「生徒が周りとかかわり合い（つながり）ながら学ぶことができる、主体的で深い学びができる課題設定を追求する」

② 全クラスでの決定事項

ア 4人班で編成し、男女市松模様に机を配置

イ グループにするときはきちんと机をつける・・・など

③ 効果的と思われる場面で協働作業の設定

ア プリントなどにより個人作業以外に、学びを深め合う場をつくる

イ 教師を待つ姿勢の打開→（わからないと言える集団づくり）・・・など

④ 授業アンケートの実施（年2回）

ア グループ（ペア）で学習するとき、困っている人に「やろう！」「わかる？」などの声かけをしていますか？

イ わからないことがあったとき、クラスや班の仲間に「教えて」と聴けていますか？

ウ 授業中に周りの人に質問したり、一緒に考えたりして、「わかった！」「なるほど！」と思えますか？・・・など

(3) 生徒たちの変容

① 学習サポーターの報告から

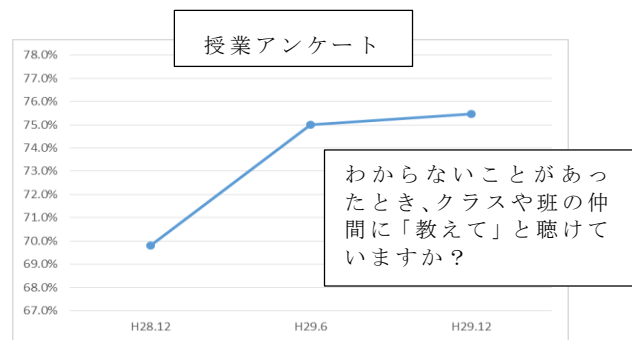
(例) 「わからないときは、周囲に聞くことはなく、答えを写している。支援に対する拒否感がある」(5月)



「友だちに聞きに行く姿が見られ、自分でできたことに達成感を持てた。できたことに対して友だちから『やったな！』と握手を求められ、恥ずかしそうに手を出した。いい表情が見られた」(10月)

② データより

「わからへん」「教えて」と言える生徒が増えた。



4 おわりに

生徒たちへの具体的な配慮の、より一層の共有と徹底が求められる。また、表面的でない、本質的な「つながり」を経験できる学びを提供していかななくてはならない。そしてそれは、支援を必要とする生徒の周りの生徒たちにとっても同様である。